

I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」：理論的観点

'Looking at Mobile Phone Displays' as a Form of Non-Verbal Communication: A Theoretical Perspective

中村 隆志¹, Adam ACAR²
Takashi NAKAMURA and Adam ACAR

¹新潟大学人文学部

Faculty of Humanities, Niigata University

²神戸市外国語大学英文学科

Department of English Studies, Kobe City University of Foreign Studies

Abstract This study was designed to theorize the action 'Looking at Mobile phone displays' as a form of non-verbal behavior and non-verbal communication. The motive to pick one's mobile phone up were categorized and aligned in the formula of non-verbal behavior and communication. Each motive was explained by the considerations about the obtained investigations for non-verbal behavior and communication. This formula can be expected as the basis for cross-cultural comparison.

キーワード ケータイ、非言語コミュニケーション、モバイル

1. はじめに

ケータイ（携帯電話、PHS、スマートフォンを総称する）の普及は早く、契約者数が世界の総人口に匹敵するところまで来ている。2007年のiphoneの登場以来、スマートフォンの普及は順調に伸びている。発表機関によって予測値に変動があるものの、総務省の情報通信白書2012年版では、2015年（平成27年）のスマートフォン（フィーチャーフォンを含む）比率は、世界市場において5割を超える見通しとなっている[1]。

スマートフォン固有の特徴というわけではないが、大きな画面、タッチパネル、ネット接続が標準的に搭載されているため、スマートフォンはフィーチャーフォン以上に、人々に利用されるようになったと見て良いだろう。スマートフォンの普及に伴い、いくつかの問題も顕在化している。例えば、2000年代後半以降、国際ジャーナルにおいても、歩道を歩行中のケータイ利用や運転中のケータイ利用の危険性を訴える論文が相次いでいる。ケータイ利用がもたらす我々の日常のコミュニケーションに対する調査は、若者の行動論として調査されやすい傾向にある。しかしながら、ケータイを利用する行為は、身体を用いて行われる以上、人と人とが相対する場面において、必然的に対面的相互作用としての意味を持つ[2]。ケータイを利用する人の行動やその増加に対して、世界にいる個々人がなんらかの影響を受けていることは疑いようがない。対面時のケータイ利用についての調査研究が必要である。

このような観点の論考が少ないことの原因は、端末普及と社会の変化のスピードが激しいことに加えて、それを顕在化させる理論的枠組みが整備されていないことにあると考える。日本では、1999年からインターネット接続ができるケータイが発売されており、その普及と人々の順応が早期に行われた。筆者(中村)は、2007年以降、この問題に取り組んでおり、小規模なが

らも調査結果を発表している。本発表では、それらの調査結果を総合し、「ケータイのディスプレイを見る行為」を非言語コミュニケーションとして理解してゆくための理論的定式化を試みる。

2. ケータイ利用の社会性と身体言語

ケータイの出現によって、公共空間は、確実に変貌している。言うまでもなく、ケータイを利用している人が増えている[3]。公共の場、すなわち知らない人がたくさんいる空間の中に一人である場合に、ケータイを利用することについて、Turkleは“missing the opportunity to talk to the stranger beside”と述べる。公共空間におけるケータイ利用者は、社会性を減じていると指摘して批判する[4]。一方で、de Sousa e Silva and Frithは、ネット接続され、Location-Baseの機能を持つようになったケータイを利用するようになってから、ケータイユーザの社会性は、strangerとの関係作りも含め、むしろ増していると反論する[5]。

総体的な社会性の増減を見積もることは困難なことが予測されるが、本稿では、社会性の増減を問題にはしない。上の両者の議論の枠組みは、「結果」としての社会性にある。ケータイを利用した「結果」として、公共性や社会性を発揮する機会が増減したかどうかを論じているのである。しかし、ケータイユーザの多くは（もちろん、ケータイユーザでなくても）、結果としてのみ社会性を有しているのではなく、自分の状況に応じて社会性を調整し続けている。つまり、人々は、不断に自らの社会性をマネジメントし続けている。社会性を語るのであれば、個々のケータイユーザが置かれた状況と、そこでの状況判断、意図、目的などを勘案しなければならない。

ケータイユーザの状況判断、意図、目的を考慮した調査として、Baron and Cambellの論文がある[6]。ケ

I-2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

ケータイ利用の男女差を比較し、知らない人との会話を避けるためのケータイの偽装利用の割合は、女性が男性よりも高く、また、通話しているフリより「ケータイのディスプレイを見る行為」（論文中の表記は、"playing with functions - e.g., checking old text messages or playing games to avoid potential conversation"）を行う割合が有意に高いことを調査から明らかにしている。

この調査は、ケータイ利用一般の男女差を比較する調査の一部に過ぎず、意図的なケータイ利用については、知人 (acquaintance) と見知らぬ人 (stranger) との会話を避けるために行った経験と頻度しか質問していない。そして、この質問内容そのものが公共空間での利用を想定して行われている。しかし、「ケータイのディスプレイを見る行為」を含めたケータイ利用は、公共空間のみならず、親しい友人・家族の前でも、ほぼ同じ身体動作で行われる。公共空間での利用も重要であるが、それ以上に親しい関係を継続・発展させてゆくべき親しい友人や家族の前での利用も大変重要であり、それらを統一的に扱う理論的視点が必要になると考える。

筆者(中村)は、2007年に「ケータイのディスプレイを見る行為」を非言語コミュニケーションの枠組みで捉えることの必要性を指摘し[7]、その後、公共空間での利用[8]、親しい者の前での利用[9]、さらにこの行為と連動して「社会的に」行われる「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」もまた非言語コミュニケーションとして捉えるべきこと[10]を主張してきた。本発表は、これまでの調査結果を総合し、「ケータイのディスプレイを見る行為」を非言語コミュニケーションの新しい枠組みで捉えるための定式化を試みる。ケータイ端末に備わる機能の利用は当然のこと、「ケータイのディスプレイを見る行為」について、公共空間から親しい者の前という状況までを統合的に扱う図式を提示する。

3. 非言語行動の契機

非言語的なメッセージのやりとりは、概念の定義上、非言語行動 (non-verbal behavior) と非言語コミュニケーション (non-verbal communication) に別れる[11]。非言語行動がメッセージの送信にあたり、非言語コミュニケーションがその受信にあたる。つまり、「ケータイのディスプレイを見る行為」を考察するにあたっては、ケータイを取り出してディスプレイを見る側の非言語行動と、その行動を見て何らかの意味解釈（当然、何とも思わないことも含む）をする側の非言語コミュニケーションに分かれることになる。本章では、前者の非言語行動について、その動機、契機を分類する。

3.1 遠隔通信

ケータイの遠隔通信機能と着信通知機能が要因となる場合である。遠隔通信には、ユーザ個人のためのパーソナルな通信（通話とメール）と、webの利用・各種サーバからの通知に分かれる。いずれもケータイ端末の最も不可欠な機能が要因となる。まとめると以下のようになる。

- 1-A パーソナルな通信の着信通知
- 1-B Webの利用・各種サーバからの通知

3.2 内蔵機能

ケータイには、受信メール、送信済みメールは当然のこと、通話・メールの発着信履歴も一覧として記録され、さらに機種によっては伝言メモなどの音声の記録も残される。これら過去の人間関係の記録、現在連絡可能な相手を表示するアドレス帳、未来の予定を記すスケジュール帳などを参照しながら、ケータイを用いて人間関係を集中管理する人が増えている[12]。我々の日常生活の中で、過去、現在、未来を見通しながら、人間関係を再考、調整することは、頻繁に行われる行為であり、ケータイに残された記録を見たくなくなる大きな要因となっている。

さらに、ケータイには、写真、音声、音楽、動画などのファイルを大量に納めることが可能になっている。ケータイに、ある瞬間の断片や、趣味のコンテンツを収納しているユーザも多く、これら呼び出し、再生こともケータイを取り出す契機になっている。また、直接的な映像の記録装置として、ケータイを取り出すことも多く、ユーザによっては、非常に大きな契機となっている。さらに、音楽再生やFelica (ICカード) 機能も含めて、まとめると以下のようになる。

- 2-A 人間関係集中管理
- 2-B ストレージと表示機能
- 2-C カメラ機能・音楽再生機能・Felica機能

3.3.1 周囲の状況1：一人で公共空間に居る場合

ケータイには、様々な情報を提供したり、ゲームのような楽しさを提供する機能がある。一人で公共空間にいて、周囲に楽しみのない退屈な場面において、自らの感興のためにケータイを取り出すことは頻繁に行われる。

意図や目的もなく、ふと何気なくケータイを取り出した経験のある人々も多い。しかし、たとえ意図や目的がなかったとしても、「ケータイのディスプレイを見て」いる人は、それだけで声をかけにくい印象を与える。そして、この声のかけにくさを逆に利用して、様々な場面で、現実空間の周囲に居る人々との関係の調整に「ケータイのディスプレイを見る行為」は利用されている[7]。

一人で公共空間に居るような、周囲に知らない人が大勢いて、時に「やりすぎず」べき状況が発生した（あるいは、発生するかも知れないと予感した）時に「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うことは、頻繁に行われている。このような場合においても、自らの存在を隠すように、その場を通り過ぎていることをアピールするようにケータイを使う場合と、むしろ、自らの存在そのものをアピールしつつ、今ここに居ない誰かとつながっており、何らかの「文脈」があってその場に居ることを言外に訴える場合がある。知らない人が多く居る状況において、周囲の人々との「適切

1-2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

な」距離を保ちつつ、その場に存在する必要がある場面で、ケータイは頻繁に利用されるのである。まとめると以下ようになる[詳細は8, 13]。

- 3-A 自らへの感興のため
- 3-B 周囲との鑑賞を避けるため
- 3-C 多重文脈性をまとうため

3.3.2 周囲の状況2：親しい者と共に居る場合

親しい者と会話していて、時間が経つのがわからなくなった経験のある人も多いだろう。親しい者と共に居る際に、時計機能を見るために、また、連絡の有無を確かめるために、ケータイを取り出した経験のある人はかなりいると考えられる。

しかし、親しい者と共に居る場合におけるケータイ利用について指摘されるべきなのは、時間や連絡の確認などではない。それらの人々との会話、コミュニケーションの状況に直接起因して、ケータイが取り出される場面である。まず、共にいる親しい人との会話を、さらに継続・発展させていくために、ケータイの機能が必要になる場合である。検索機能を用いる、地図を見る、スケジュールを確認する、ストレージに格納している写真や画像を見せる、アプリを紹介して使ってみせるなど、ケータイの機能を利用して、会話を継続・発展させることは、現在では、広く行われている行為である。中村[10]は、この「ケータイのディスプレイを“見せる”行為」もまた、非言語コミュニケーションとして機能することを指摘している。

逆に、会話の進行状況が悪い場合にも、ケータイは取り出されやすい。知らない内容が話題に上って理解できず話に参加できない、話が退屈で面白くない、話題の内容が自分に都合が悪い、会話を早くやめたい、共に居る者同士が険悪になる（特に夫婦ゲンカ）など、様々な場合にケータイが取り出されることがこれまでの調査から判明している。まとめると以下ようになる[詳細は9]。

- 3-D 時間や外部通信の確認のため
- 3-E 会話の継続・発展のため
- 3-F 会話の停滞や会話からの撤退のため

3.4 その他

上記の3.1節と3.2節は、それぞれ、ケータイ端末に備え付けられた通信機能、デジタル化された情報を操作する機能からケータイを取り出す行為を行う契機を整理した。3.3.1節と3.3.2節は、ケータイ端末に搭載された通信機能やデジタル操作機能ではなく、ケータイ端末を取り出す身体的行為が、相対している現実空間の状況を調節する役割を果たす場合である。それぞれの契機について整理・分類を行ったが、あくまで代表的な機能に基づいた典型的な機能と役割の整理・分類である。通信機能と内部のデジタル操作機能を融合的に組み合わせたアプリの開発は今後も続くであろう。また、利用者個人がケータイ端末のある属性を利用して、本来の機能と異なる使い方をする可能性もある

(ちなみに、筆者(中村)は、日差しの強い時に、目の上にケータイをあてて、「陽よけ」として使用することが多い。薄くて軽くて平べったい、という属性を利用しているだけだが、たまたまケータイは最も身近に在るので使用頻度は高い)。

3.1節-3.3.2節の分類は、これまでの調査結果から多く抽出された機能の内の典型的なものを整理・分類した項目であり、これらに挙がらないような契機もまだまだ出現する可能性があるが、現段階では、3.1節から3.3.2節の分類外の「ケータイを取り出す」ような非言語行動の契機をその他とする。ただし、その他は、図1には含まず、3.1節から3.3.2節で述べた典型的な機能のみを図式に取り入れる。

4. 非言語行動・コミュニケーションの図式

3章で整理・分類した非言語行動とこれまでの知見に基づき、ケータイを取り出す非言語行動・非言語コミュニケーションの図式を図1のように作成する。

非言語行動の受容としての非言語コミュニケーションには、3.3.1節のような場合、つまり公共空間に一人である者が行う「ケータイのディスプレイを見る行為」には、話しかけにくさが感受されやすい。また、3.3.2節のような場合、つまり共に居る親しい者が行う「ケータイのディスプレイを見る行為」には、大きく分けて3つの受容の仕方（非許容・保留・許容）に分かれる[9]。これらを踏まえ、受容側としての非言語コミュニケーションは図1(下段)のようになる。

また、これら非言語コミュニケーションを受容する者の多くは、自らもケータイを持っていることがほとんどである。自らもまた、ケータイを取り出す非言語行動を行い、それが他の人々に受容されていくことも理解していることが多い。これら非言語行動・非言語コミュニケーションは、ケータイユーザによって、試行錯誤と反省的利用が繰り返されていると考えられるため、フィードバックループが必要になる。

5. Discussion

これまでの調査を総合し、「ケータイのディスプレイを見る行為」における非言語コミュニケーションの図式を作成した。曖昧な解釈を許容し、さらにその曖昧さを利用して、拡がり続けるこの非言語行動・コミュニケーションについて、理解を深めていく必要があると考える。

国内では、すっかり定着した感のあるこの非言語コミュニケーションであるが、これはケータイによる3Gネット接続が比較的早期に進行した日本での現象である。世界には、スマートフォンの普及とケータイによるネット接続の本格化がほぼ同時進行である地域もあることから、この非言語コミュニケーションが各国各文化において、様々に受け止められると予想される。先行的に行ってきた調査結果を活用して、今後は、国際比較、異文化比較の観点で、このミクロな社会現象を理解していくことができると期待される。

参考文献

I -2 メディア・情報行動1 (心理・受容)

- 1) 総務省(2012)：『情報通信白書』平成 24 年度版、第 1 部第 1 章第 2 節、ぎょうせい。
- 2) ゴフマン, E.: 『集まりの構造』(丸木恵祐子, 本名信行訳) 誠信書房, pp.37-155, (1980).
- 3) 中村隆志(2011)："ケータイ・コミュニケーションと公共空間の変貌", 中村隆志、新潟大学人文学部ブックレット。
- 4) Turkle, S.(2011): "Alone Together:Why we expect more from technology and less from each other", New York: Basic Books.
- 5) de Sousa e Silva, A. & Frith, J.,(2012): "Mobile Interfaces in Public Spaces", Routledge, New York.
- 6) Baron, N. S., & Campbell, E. M., (2012): "Gender and mobile phones in crss-natiional context", Language Sciences, 34, pp.13-27. Elsevier.
- 7) 中村隆志(2007)："非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」", 情報文化学会誌, 14(1), pp. 31-38, (2007).
- 8) 中村隆志, 大江宏子(2009)："公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」", 情報社会学会誌, Vol.4, No.1, pp. 27-37.
- 9) 中村隆志(2013)："「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する非許容・保留・許容", 情報社会学会誌, Vol. 7, No.2, pp.5-22.
- 10) 中村隆志, 大江宏子(2010)："もうひとつの非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」", 情報文化学会誌, Vol.17(1), pp.11-18.
- 11) V. P. リッチモンド, J. C. マクロスキー(2006)：『非言語行動の心理学』（山下耕二：編訳）, 北大路書房。
- 12) 中村隆志(2012)：ときめきの波、2012 年社会情報学会 (SSI) 大会ワークショップ「恋愛ドラマ等に見るケータイのメディア表象」(2012 年 9 月 16 日)配付資料
- 13) 中村隆志(2008)："多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ",情報文化学会誌,15(1),pp.12-19.

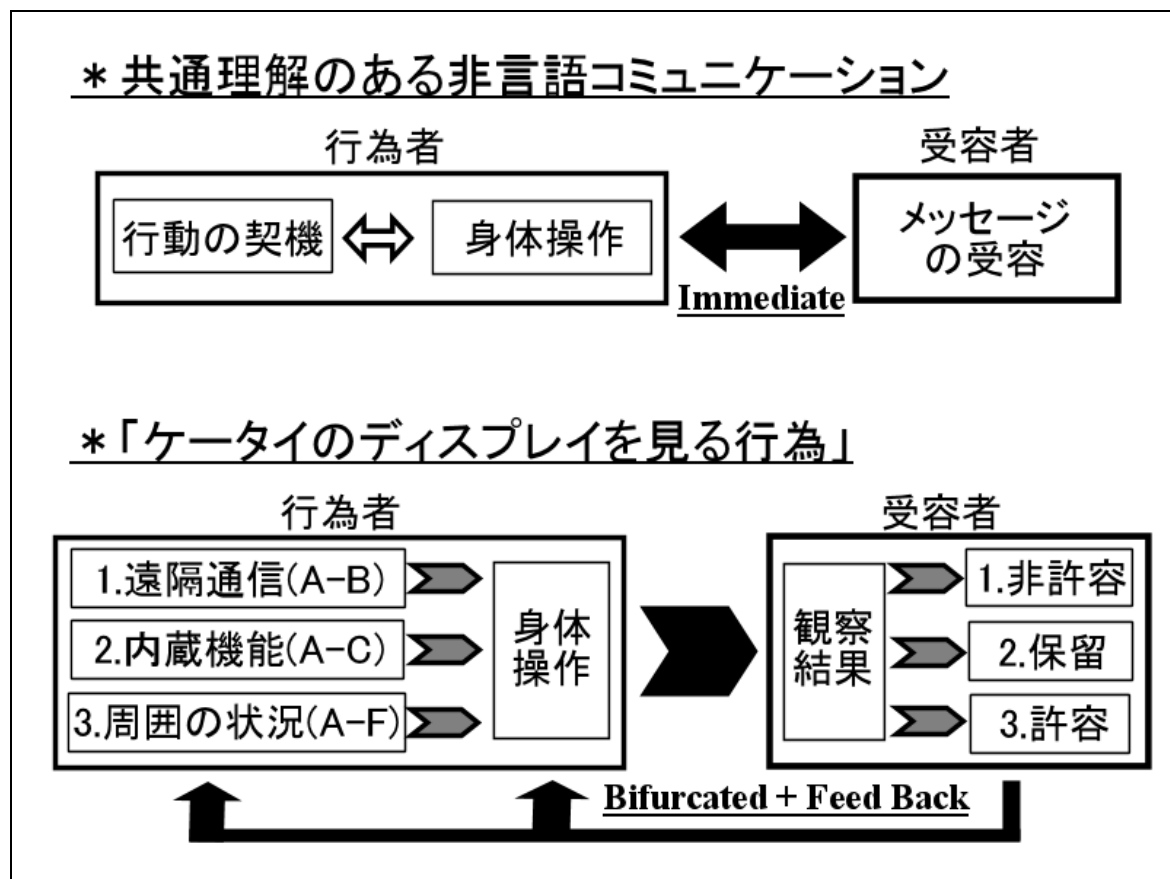


図 1：「ケータイのディスプレイを見る行為」における非言語行動と非言語コミュニケーション